



障害と身体を めぐる旅 2019

文化庁委託事業 令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業
(文化芸術による共生社会の推進を含む)

「横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム形成事業」

横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム事務局

(認定NPO法人STスポット横浜、社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団)

ごあいさつ

STスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるNPOです。「アートの持つ力を現代社会に活かすこと」をミッションに、小劇場「STスポット」を運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校での芸術家による授業の実施や、地域の文化団体支援などを行っています。

福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業は、2016年から開始しました。地域に暮らす障害者が、文化芸術体験活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障害の有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた基盤整備の一翼を担うことを目的としています。


本年もさまざまな風景、表現と出会いました。この冊子では、旅の様子的一端をみなさまにお伝えしていきます。

[実践編]

- 04 スプラウト×白神ももこ（演出家・振付家・ダンサー） 「ひろがる身体、つながる身体」
- 06 みらまーる×福留麻里（ダンサー・振付家） 「それぞれの表現を育てる」
- 08 リエゾン笠間×入手杏奈（ダンサー・振付家） 「“触れる”からはじまるダンス」
- 10 アガペサポートセンター×宮内康乃（作曲家） 「みんなで声を重ねる」
- 12 みどり福祉ホーム×伊東純子（デザイナー・アーティスト） 「たいせつなものを包む、彩る」
- 14 報告会 障害福祉と文化芸術の関わりを考える [実践編] 芸術家とともに過ごす時間
- 15 カメラマン、コーディネーターの視点

[調査編]

- 17 横浜市区民文化センターにおける障害者へのバリアフリー対応に関する調査報告
- 27 神奈川県内における障害者の文化芸術活動に関するヒアリング結果報告
- 28 障害福祉と文化芸術の関わりを考える勉強会
 - ◎第1回 身体と身体の出会い
 - ◎第2回 障害のある人との向き合い方～合理的配慮って？
 - ◎第3回 創作活動を支えるために
 - ◎第4回 障害のある人の声をきく
- 33 報告会 障害福祉と文化芸術の関わりを考える [調査編] 地域で文化芸術に親しむためには
- 34 おわりに



障害と身体を めぐる旅 2019

[実践編]

今年度は神奈川県内にある5つの障害福祉サービス事業所に芸術家とともに出かけ、主に文化施設に足を運ぶことが難しい重度重複障害のある人や、活動に焦点があたりづらい精神障害のある人に向けて文化芸術体験を行なう、ワークショップ実施事業に取り組みました。また、2月には、芸術家と施設職員と一緒に活動を振り返り、それぞれが感じたことをお話いただく報告会の機会を設けました。ここでは、ワークショップと報告会の様子をご紹介します。



スプラウト × 白神ももこ

ダンス
DANCE

「ひろがる身体、つながる身体」

期間：2019/9/17㊦・9/25㊦・10/23㊦ 時間：13:30～14:30

参加者：1日目:11名・2日目:10名・3日目:8名

対象：主に身体障害と知的障害を併せ持った成人

アーティスト：白神ももこ（演出家・振付家・ダンサー） アシスタント：内海正考・北川結

施設名 スプラウト
 運営法人名 NPO法人障害児・者・家族サポート事業所スプラウト
 施設種別 障害福祉サービス事業所(生活介護)
 住所 神奈川県平塚市北豊田510-3
 URL <http://sprout.or.jp>



01

09/17㊦

参加11名

車椅子などに座って輪になっている参加者のもとへ順番に挨拶に行き、それぞれの身体の動きや、発する音、視線を拡張するように白神さんたちが身体で応答する。内海さんが鳴らす三味線の音に興味を示す人もいた。





02

09/25*

参加 10名

みんなマットに横になる。すぐ横、頭上、足元に3人が挨拶しに訪れ、予想がつかない動きにそわそわと周囲の様子を伺う。たまたま寝返りをしたり、手を伸ばしたりと反応していた。



03

10/23*

参加 8名

最終回は全員で取り組むワークが中心となった。近くにいる人の身体に触れてつながっていき、みんなでクモの巣のような状態になる。誰かひとりの名前を呼びながらその人の近くに集まる、発した声を繋げて歌をつくるなど、他者に意識を向ける／向けられるような体験となった。

福祉施設職員からのコメント

スプラウトは、楽しい／楽しくないことを区別する、自分に興味がある／無関心な人を見分ける、快／不快を言葉ではない表現方法で発することを得意としている人たちが集まる場所である。単純明快な基準で人や事象を観る能力は、いわゆる健常者のそれと比べて長けているのかもしれない。そんな人たちが、自分を楽しませようとしてくださる芸術家たちに巻きこまれて自然発生的に大きな「塊」となっていく。回を重ねるごとにお互いの距離が近くなり、終わる頃にはずっと前から知り合いだったかのような錯覚さえあった。(佐藤大輔)

アーティストからのコメント

ここ数年「寄り添う」「人と同じ目線でものを見てみる」ことについて考えていたので、アーティストとしてのふだんのリサーチに近い状態だったと思う。まずは一緒に踊ってみないと!と、ほとんど内容を決めず、挨拶するようにデュオをしたり、その場で思いついた楽しいことを共有したりした。それぞれ受け止めに時間差があるので、唐突で意外性がある面白いことが起き、職員も一緒に楽しむ、とても人間的な現場だと感じた。みんな違う時間軸で、かつその重みや意味さえも違うということを改めて学んだ。(白神ももこ)

コーディネーターからのコメント

毎回白神さんたちが参加者のみなさんの微細な表現をすくい上げ、その人の身体になってみる、ということからたくさんのダンスが生まれました。自分の動きや声、目の前で別の身体を通して返ってくることに、驚きと喜びが伝わってきました。物をつかむ動作や何かを伝えるための声など、いつもは目的や意味を求められる身体が、白神さんたちとの関わりによってその役割から離れたときに、一人ひとりが感じている世界が垣間見えたように感じました。(川村美紗)

白神ももこ
shiraga momoko



ダンス・パフォーマンス的グループ モモンガ・コンプレックス主宰。全作品の構成・振付・演出を担当。無意味・無駄を積極的に取り入れユニークな空間を醸し出す作風には定評がある。その他、演劇での振付や、他分野のアーティストとのコラボレーションも手がける。子どもから大人まで老若男女問わず一般向けのダンスワークショップや教職員向けのワークショップなども行っている。2017-2018年度セゾン文化財団ジュニアフェロー。四国学院大学非常勤講師。2019年度より埼玉県富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。 <http://momongacomplex.info>



みらまーる × 福留麻里

ダンス
DANCE

「それぞれの表現を育てる」

期間：2019/8/6[㊤]・8/30^金・9/30^月・10/29[㊤] 時間：14:00～15:00

参加者：1日目:7名・2日目:6名・3日目:7名・4日目:4名

対象：主に精神障害のある成人

アーティスト：福留麻里（ダンサー・振付家） アシスタント：岡田智代・高橋牧

施設名 地域活動支援センター みらまーる

運営法人名 特定非営利活動法人 松の実会

施設種別 地域活動支援センター

住所 神奈川県茅ヶ崎市東海岸北2-9-7

URL —



01

円になって、見えないボールを誰かに投げるなど、隣の人と動きをやり取りする。後半は部屋を暗くして身体をほぐし、自分の身体の状態をじっくり見つめた。

08/06[㊤]

参加 7 名





02

08/30(金)

参加 6名

誰かの動きを真似することを順番にやってみる。途中から「ゆらゆら」など、どこか海を感じる擬音に加わった。後半は新聞を破るなどして、音を楽しんだ。



03

09/30(日)

参加 7名

部屋の中を歩き回って、出会った人と挨拶をしたり部屋にある物を使って音を出す。前回の擬音をヒントに、参加者から出た言葉と動きを繋げて「みらまー島のあいさつ」を作る。



04

10/29(火)

参加 4名

前回の参加者から続きを考えてきた、と振り付けがかわり、「みらまー島のあいさつ」が完成。後半は部屋を暗くして、小さなライトの光や、ささやかな楽器の音に浸った。

福留麻里
fukutome mari



ダンサー・振付家。1979年東京生まれ。

2001年より新舗美佳と共に身長155cmダンスデュオほうほう堂として活動。

独自のダンスの更新を試みる。2014年よりソロ活動を開始。

日常的な仕草やくり返せる動き、物の感触や佇まい、無作為なスピード感など、身近なこと単純なことに動きのはじまりを見つけて踊る。

<https://marifukutome.tumblr.com>

福祉施設職員からのコメント

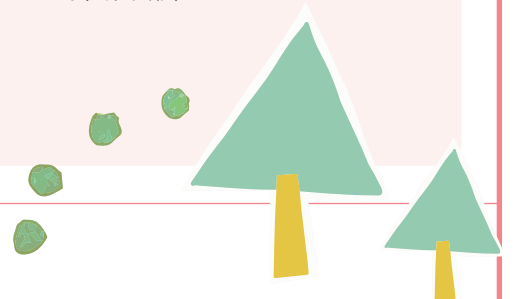
精神障害をお持ちの方は自分の気持ちを表現するのが苦手な方が多いので、最初はみんな楽しんでくれるかなと不安な気持ちが大きかったです。しかし、福留さんたちの関わりによって、その人らしい動きが自然に引き出されたことに驚きました。特にふだんはあまり表現をしない人から、積極的にアイデアが出てきていたことが印象的でした。表現しやすい／しにくいといった違いがあるだけで、みなさん「表現したい」という気持ちはどこかに持っているのだと感じました。(羽根由起江)

アーティストからのコメント

私は少し身構えていたと思う。自由な表現が苦手な方が多い、とも聞いていた。でも、みらまーの皆さんは想像以上に軽やかにこちらの思い込みの線を越え、思いもよらない素敵な動きや音を発してくれた。発し方には、お一人ずつ大胆さや控えめさの幅があり、その大小入り混ざる波のようなものが部屋中充滿し、うねりになる時間があった。その波に乗って「みらまー島のあいさつ」という小さな儀式のようなものが最後に生まれた。嬉しい収穫だった。(福留麻里)

コーディネーターからのコメント

いつも一緒に過ごしている相手でも、アイコンタクトや動きの真似など、ふだんの距離感とは違うアプローチをすることで、新鮮な関係が生まれていたのではないかと思います。発信すると同時に、自分の身体の伸び具合を感じる、床の感触を味わう、音に耳を澄ますなど、身体感覚を開いて自分の輪郭を見つめる時間もあったことが、その人らしい表現に繋がっていたように感じました。表現の見つけ方、渡し方のきっかけを福留さんたちが作り、みなさんの中でその表現が育っていくような取組みとなりました。(川村美紗)





リエゾン笠間 × 入手杏奈

ダンス
DANCE

「“触れる”からはじまるダンス」

期間：2019/12/11[㊦]・2020/1/15[㊦]・1/22[㊦] 時間：10:15～11:15、14:00～15:00

参加者：1日目:18名・2日目:20名・3日目:18名

対象：主に身体障害と知的障害を併せ持った成人

アーティスト：入手杏奈（ダンサー・振付家） アシスタント：坂本弘道・涌田悠

施設名 障害者支援施設 リエゾン笠間
 運営法人名 社会福祉法人同愛会
 施設種別 障害者支援施設
 住所 神奈川県横浜市栄区笠間3-10-1
 URL <http://liaison-kasama.com>



01

12/11[㊦]

参加 18名

入手さんたちによるデモンストレーションから始まり、手を繋ぐ・触れる・見つめるなどを一人ひとりと丁寧に交わしていた。入手さんの動きを自然と真似する参加者もあられ、その動きが次第に連鎖し、会場にいる全員が自由に踊る解放的な空間へと変化した。





02

01/15*

参加 20名

マットの上で思い思いの体勢になり、職員のみなさんも彼らに寄り添うように過ごした。入手さんからの「目的やゴールを決めずにただ相手に触れてみましょう」という言葉に初めは戸惑っていた職員のみなさんも、それぞれのペースで相手と向き合いながら、体温や呼吸を感じていた。



03

01/22*

参加 18名

前半は全員マットの上で過ごしながら、坂本さんの演奏に耳を傾けたり、近くの人と自然に触れ合うゆったりした時間が流れた。後半は車椅子に乗った状態で動き、あちこちで「触れる」から始まる「ダンス」が生まれていった。



入手杏奈
irite anna



幼少よりクラシックバレエを学ぶ。コンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事。ソロ活動を主軸に、ダンサーとしてさまざまな振付家の作品に出演。画家、染織家、音楽家とのコラボレーションや、演劇作品への振付・出演、多数の音楽PV(9mm Parabellum Bullet、ポルノグラフィティ、YUKI、スキマスイッチ等)の振付・出演を行う。ソロ作品では自筆のテキストを使用し、発語と身体の在り方を模索。2014年「第1回ソロダンスフェスティバル2014」最優秀賞受賞。2018年「SICF19PLAY」住吉智恵賞受賞。桜美林大学非常勤講師。

福祉施設職員からのコメント

身体障害とダンスという組み合わせは職員としても見通しが立たないことであったため、初日は不安があった。ワークショップではチェロの演奏に合わせて、入手さんたちが利用者に触れながらコミュニケーションをとると、緊張と心地よさからふだんでは見せることのない表情や反応が次々と生まれていた。職員も同じように利用者とは触れ合い、時間を共有することで「時間の流れ」「触れ方」「心理的距離感」など支援に必要な要素が多いことに気づかされた。また、支援する側、される側の関係をリセットすることができた。(浅井徹)

アーティストからのコメント

3日間を通して、自分のペースで呼吸をしたり、物を見たり、触れたりすることの重要性をととても強く感じました。結果や目的を持たずに、ただ音楽を聴いたり、身体を揺らしたり、誰かに触れたりする時間はとても贅沢で、一人ひとりがその瞬間を味わい多くのことを受け取っているようでした。ゆっくりと時間をかけて目の前の人と向き合うことで、その人のことをもっと感じたり知っていくきっかけになっていたら嬉しいです。そしてどの人にも平等に自由があることを、これからも活動を通して出会う人たちと共有していけたらと思います。(入手杏奈)

コーディネーターからのコメント

職員のみなさんが参加者のみなさんとペアになり、目の前の人の身体を感じる、ということにとことん向き合った時間となりました。自ら身体を動かして表現をする人もいれば、身体の反応が微細な方も多くいました。身体に対する感覚を研ぎ澄ますことで、相手の意識に気づき、自分の心が動く。一見すると、じっと止まっているような身体の間には交わされるささやかなやりとりに、ダンスが生まれる瞬間を見たような気がしました。(川村美紗)



アガペサポートセンター × 宮内康乃

音楽
MUSIC

「みんなで声を重ねる」

期間：2019/9/24[※]・10/28[◎]・12/6[◆] 時間：13:30～14:00

参加者：1日目:8名・2日目:6名・3日目:7名

対象：主に身体障害と知的障害を併せ持った成人

アーティスト：宮内康乃（作曲家） アシスタント：尾形直子・アイケイイチ

施設名 アガペサポートセンター
 運営法人名 社会福祉法人日本キリスト教奉仕団
 施設種別 障害福祉サービス事業所(生活介護)
 住所 神奈川県座間市小松原2-10-14
 URL <http://www.agape-jcws.com>

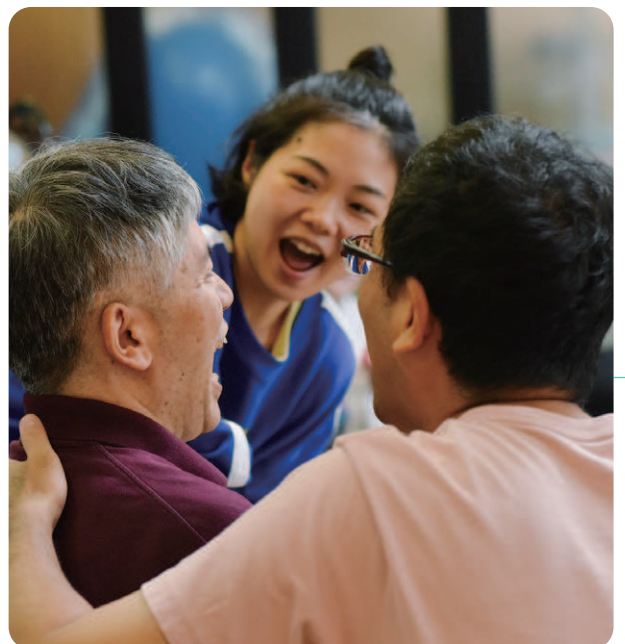


01

09/24[※]

参加 8名

全員で大きな円になる。深呼吸することから始まり、徐々に息に声を混ぜていく。宮内さんが鳴らす鐘の音を合図に「んー、うー、おー、あー」と流れるように母音を変化させながら発声をした。後半では誰かが出した声を全員で真似て、十人十色の声を聞き合った。





02

10/28(月)

参加 6 名

前回は行なった母音の発声から始める。後半は風や水、動物など自然の中の音を声で表わした。言葉とは違う聞き慣れない声に包まれ、不思議そうに耳を傾けていた。



03

12/06(金)

参加 7 名

開始前から「うー、あー」と発声する人もいて、声を出すことにもすっかり慣れた様子。最後は全員で円になり、振付けと掛け声を合わせてお祭りのような雰囲気。



福祉施設職員からのコメント

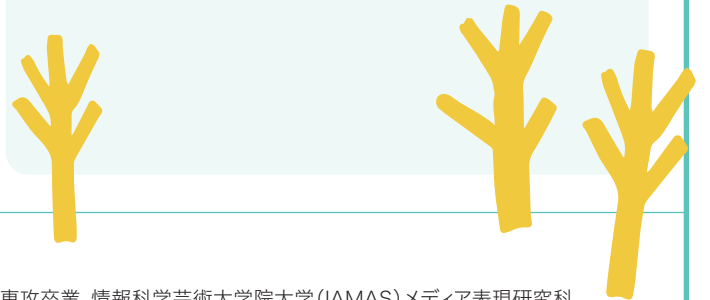
初回は職員も利用者のみなさんも何をやるのだろうという緊張感があったが、興味津々という方も多く、ふだんと違う体験が出来た。2回目は前回と同じ内容も含めつつ新しいことにも取り組み、慣れてきた様子も見られた。3回目は、お祭りの雰囲気とメロディのあるかけ声、動きも合わさって、楽しさを笑顔や動作で表現する方が多かった。3回を通して積み重ねたその反応が見られる方もいて、有意義なプログラムであった。(河合優)

アーティストからのコメント

各回30分と短い時間でしたが、回を重ねるごとにみなさんの感覚がどんどん開き、確かに前回の活動や私たちのことを覚えていて、深まっていった印象がありました。それぞれが自分なりの方法で表現して下さっていたこと、「聴き合う」という空気を共に作る事ができたこと、単純なリズムやメロディの繰り返しが、共振しあう強い力を持つと実感できたことは私にとっても大きな収穫でした。職員のみなさんが一緒に楽しんでくださったことも大きかったと思います。(宮内康乃)

コーディネーターからのコメント

一言で「声」と言っても、リズムを変えてみたり唇を震わせてみたり、身体さまざまな動きが加わることで全く違うものになります。もともと一人ひとり異なる声ですが、いろんな遊び方をすることで、さらに個性が際立ちました。参加者のほとんどは言葉でのコミュニケーションが難しい方でしたが、文字には書き起こせない擬音のような声で満たされた時間の中では、そのような方々の世界に入り込んでコミュニケーションをとっているような感覚がありました。(川村美紗)



宮内康乃
miyauchi yasuno



東京学芸大学G類音楽科作曲専攻卒業、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)メディア表現研究科修了。楽譜ではなく、声や呼吸など、身体其自然なリズムを生かして音を紡ぎ出す、独自の表現に取り組む作曲家。2008年より音楽パフォーマンスグループ「つむぎね」を立ち上げ、活動を開始。おもに声と鍵盤ハーモニカを使い、空間全体に響きを生み出す、音楽と舞台表現を融合したユニークなパフォーマンスを展開する。2011年、第6回JFC作曲賞受賞。
<http://tsumugine.com> (つむぎね)



みどり福祉ホーム × 伊東純子

美術
ART

「たいせつなものを包む、彩る」

期間：2019/10/21^①・11/11^②・11/18^③ 時間：10:30~11:15、13:30~14:15

参加者：1日目:19名・2日目:18名・3日目:19名

対象：主に身体障害と知的障害を併せ持った成人

アーティスト：伊東純子（デザイナー・アーティスト） アシスタント：佐々木徹・山下真理子

施設名 みどり福祉ホーム
 運営法人名 NPO法人みどり福祉ホーム
 施設種別 障害者地域活動ホーム
 住所 神奈川県横浜市緑区十日市場町808-3
 URL <http://midori-fukusi.wixsite.com/midorifukusi>



01

10/21^①

参加 19名

まずは素材に親しむために伊東さんの作品「Soft Toy」で遊ぶ。カラフルなビーズクッションや、ファー素材のボールなど、さまざまな色と素材に囲まれ、触り心地にうっとりする方もいれば、大はしやぎで職員さんとボールを投げ合う方も。





02

11/11(月)

参加 18名

シンサレートという軽くて暖かい素材でできた羽織りと、フェイクファーのポシェットにフェルト生地や毛糸などで装飾する。ポシェットには、ぬいぐるみや家族写真など、用意してきたそれぞれの「大切なもの」を入れる。



03

11/18(月)

参加 19名

作った衣装を身に着けて、ファッションショー。それぞれが選んだ好きな音楽に合わせて、ランウェイに見立てた廊下を進む。出番前は緊張気味だった参加者も、観客の前に出ると笑顔でアピールしていた。

福祉施設職員からのコメント

最後のファッションショーでは、音楽や周囲の盛り上げ、衣装や利用者へ注目を集める工夫などにより、利用者が輝いていました。毎回同じ利用者と職員がペアを組んで実施したので、最初から最後までトータルな視点で取り組むことが出来たと思います。職員の方がどう楽しんでよいか迷うこともあり、かといってあまりゴールが明確すぎると誘導してしまいかねないところに難しさを感じました。職員間で考えを深めるきっかけとなりました。(渡邊 紘士)

アーティストからのコメント

「自分のことが大好き！」なみなさんに出会えたことが何よりの発見と喜びでした。ファッションは自分をどう見せるか、見てもらうかというコミュニケーションツールでもあります。何より大好きな自分を大切に包み、自分のために装うという本来のシンプルな意味を再確認できました。生きづらいと言われている現代社会でファッションが、自分をもう一度好きになれたり、他人を認めたり、寛容できたりするきっかけになって欲しいと願います。またお会いしましょう！(伊東 純子)

コーディネーターからのコメント

「大切なもの」というテーマを通して、一人ひとりの物語が立ち上がるような作品が完成しました。ファッションショーでは、紙吹雪を浴びたり特技を披露したり、その人にスポットが当たる瞬間となる工夫がちりばめられ、自分や仲間を大切にできる気持ちが伝わる場面でした。作品自体は個々で製作しましたが、「見る、見せる」ということも含めて成立するファッションならではの取り組みを通して、みんなでひとつの作品を作ったような体験となりました。(川村 美紗)

伊東純子
ito junko



多摩美術大学絵画科油画専攻、文化服装学院服飾専攻科技術専攻卒業。2009年オリジナルブランド「un:ten」(アンテン)を立ち上げる。黄金町エリア長期レジデンスアーティストとして、京急高架下日ノ出スタジオを拠点とし、オーダー服制作、期間限定ショップ、オリジナルグッズ制作、黄金町芸術学校服飾コース講師などを行う。舞台衣装から日常着、遊具からアート作品まで、布でさまざまなものを作っている。2018年上大岡/笹下にてアトリエ移転。制作、展示会、my sewing room(個別レッスン)などを行なっている。 <https://un-ten.com>



障害福祉と文化芸術の関わりを考える 福祉施設/文化施設から見たこと

[実践編] 芸術家とともに過ごす時間

[ダンス] 白神ももこ (演出家・振付家・ダンサー) 佐藤大輔 (NPO法人スプラウト 管理者)

[美術] 伊東純子 (デザイナー・アーティスト) 渡邊紘士 (障害者地域活動ホームみどり福祉ホーム 主任)

日時：2020年2月6日(木) 14:00～15:10 参加者：49名

場所：障害者スポーツ文化センターラポール上大岡 地域連携室 (神奈川県横浜市港南区上大岡西一丁目6-1 ゆめおおおかオフィスタワー6階)

この報告会では今年度の活動報告と、福祉施設で行なった芸術家によるワークショップ2事例についてご紹介しました。

福祉施設職員と芸術家をゲストにお招きし、ワークショップで起こっていたことを振り返りながら、

それぞれから見た参加者の変化や、自身が得た気づきについてお話しいただきました。



最初にSTスポット横浜から今年度の事業について報告したあと、スプラウトでのダンスの取組み(P.4～5参照)について紹介しました。スプラウトの佐藤大輔さんは、「利用者みなさんが白神さんに対して警戒心を見せず、また白神さんも車椅子に乗っている利用者みなさんと視線を合わせてくださった」と身体的にも心理的にも距離が近かったことが印象的だったと話しました。一方、重度重複障害のある方との関わりは今回が初めてだったという白神ももこさんは、「会ってみたいと分からないと思い、その場で内容を決めた。相手と視線を合わせる、同じものを見ているという、ちょうど作品づくりの中で考えていたことができた」と、いつもの創作の場面と同じ心持ちでいられたと話しました。

続いて、芸術家によるワークショップは今年で4年目であるみどり福祉ホームでの、美術の取組み(P.12～13参照)を紹介しました。みどり福祉ホームの渡邊紘士さんは、「いつも職員がなかなか思いつかない活動を行なっている。今回も利用者みなさんに対して、先入観なく踏み込んでくれていた」と、芸術家が活動に関わって感じたことを話しました。今回ご一緒していただいた伊東純子さんは、障害のある子どもたちとの関わりは経験がありましたが、成人の方が通う施設は初めて訪れま

した。そのなかで、「そばに付き添う職員さんに(飾りを付ける位置など)的確に指示する人がいたり、職員さんがその人の意図をくみ取ったりしていた」と、利用者との関係性によって創作が進んでいたことが印象的だったと振り返りました。

そこから、それぞれの立場から考える障害のある人の意思のくみ取り方についてお話をうかがったあと、会場みなさんからも障害のある人の芸術活動のあり方について問うような質問があり、さらに議論は深まりました。

最後に白神さんと伊東さんに、今後障害のある人と取り組んでみたいことをうかがいました。埼玉にある文化施設の芸術監督も務める白神さんは「劇場に、障害の有無に関わらずいろいろな特徴を持った人たちが「いる」ということが、当たり前になると良い」、伊東さんは「今回出会ったみどり福祉ホームみなさんから元気をもらった。彼らのパワーをもっと広く知らせたいし、長く付き合いたい」と、話してくださいました。

障害福祉と文化芸術が関わることで生まれる表現の豊かさを共有するとともに、お互いが交わる場のあり方について、考えを深める機会となりました。



佐藤大輔
(さとう・だいすけ)

NPO法人スプラウト看護師兼管理者。大学病院でがん末期患者に積極的に関わる。退職後和光大学に進学、後に大学院へ。同時に介護福祉士養成校の講師を始め、聖ヶ丘教育福祉専門学校の非常勤講師。2017年より現職。



渡邊紘士
(わたなべ・ひろし)

1977年神奈川県出身。横浜市内の障害者施設でサービス管理責任者等を14年ほど務めたのち、みどり福祉ホームに入職。現在4年目を迎え、主任職を務める。横浜市作業所連絡会の広報役員としての活動も17年続けている。

※他ゲストのプロフィールは各ページをご参照ください。 白神ももこ (しらが・ももこ) → P.5 / 伊東純子 (いとう・じゅんこ) → P.13

カメラマン、コーディネーターの視点

ワークショップの記録写真を撮る人、ワークショップをコーディネートする人として、
芸術家と障害のある人たちがともに過ごす時間に寄り添っていた視点から、見えていた風景をご紹介します。

レンズを通して見えた美しさ

金子愛帆（ダンサー・フォトグラファー）

STスポット横浜のワークショップ事業に同行して記録撮影をさせていただくようになり、今年度で3年目になりました。アーティストのチャレンジと利用者みなさんの思いもよらぬ反応に、毎回わくわくして楽しみながら撮影しています。そして、福祉施設職員みなさんとSTスタッフの情熱と仕事に対する向き合い方、利用者みなさんの生きる美しさに、毎回力をもらいます。この事業がより多くの施設で、可能ならもっと継続させて行けるようになればいいなと思っています。

私がふだん写真を撮る時は、何か目に見えるアクションが起こった時に撮ることが多いのですが、この現場ではまずは利用者さんとゆっくりとコミュニケーションをとり、そこにあることを

よく見てから撮るようにしています。そうすると、つい表情が豊かであることが美しさの基準のようなものになっていることに気づく時があり、それは変えていかなければならないと思っています。時間に焦らず待って、ひょっとしたら一見なにも起こらなくても、今空気が変わった、今つながったような気がした、と思える時にシャッターを切ります。

と同時に、なにも起こらない美しさにふいに涙が出そうになること。一人ひとりにその方の身体があって、それは私の思う良さや悪さの基準でははかれない気がする。

そういうことを写真に残すには、いったいどうしたらいいかははまだ答えが出ず、考え続けています。



kaneko manaho

1989年生まれ。18歳から独学で写真を撮り始め、大学卒業後からフリーのカメラマンとして活動。同時にダンサーとしても活動しており、さまざまな振付家の作品に出演している。写真の仕事は舞台やイベントなどの記録撮影のほか、家族写真、企業紹介、商品紹介など多岐に渡る。STスポット横浜のワークショップ事業には2017年度から同行し、今年度で3年目。

<https://kanekomanaho.tumblr.com>

表現が生まれる光景

川村美紗（NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部）

今年は重度重複障害のある人や、精神障害のある人が日々を過ごす福祉施設に芸術家みなさんと出かけていきました。言葉をコミュニケーションの手段としない人や、気持ちを言葉に表すことが苦手な人も多く参加するなか、ダンス、美術、音楽とジャンルはさまざまですが、どの現場でも、芸術家が五感を使って障害のある人と対話することで表現が生まれる光景が印象的でした。

芸術家から表現のきっかけを渡され、自分の身体やその中にある気持ちをやわらかくしてみる。そしてその空気を誰かと共有できる場が

あって、その時に「なにかを伝えたい」という気持ちが生まれる。もしかしたら誰にも伝えず、自分の中にそっとしまっておいても構わないのだと思いますが、やっぱりその身体から滲み出るものがあって、それを誰かがそっと見つける。そんなことが繰り返られるなかで、その場にいる一人ひとりの“その人らしさ”がくっきりとしてくるのが分かります。

どんな人の中にも表現があって、その表現に触れる手段はひとつではありません。

ワークショップが行われている時間はいつも、見逃したくない瞬間で満たされています。



kawamura misa

横浜市内の障害者施設で職員として障害のある人の支援に携わったのち、2017年4月にSTスポット横浜に入職。「福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業」を担当する。



障害と身体を めぐる旅 2019

[調査編]

地域に暮らす障害のある人が文化芸術に触れる機会を創出する場所として、身近な場所にある文化施設が考えられます。横浜市には地域文化拠点として市内18区中10区に区民文化センターが設置されています。今回は区民文化センターに焦点を当て、障害のある人との関わりについてヒアリング調査を行ないました。また、文化芸術関係者が障害福祉の知見を深めるための、勉強会や交流の機会を設けました。ここでは、ヒアリング調査の結果と勉強会や報告会の様子についてご紹介します。

横浜市区民文化センターにおける 障害者へのバリアフリー対応に関する調査報告

文化庁委託事業として、令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)「横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム形成事業」を実施しました。事業の一部として、地域の文化施設や芸術文化団体と障害福祉についての知見を深め、障害者の芸術活動を促進するためのプラットフォームを創出することを目指し、文化施設職員等の障害理解教育事業を行ないました。横浜市には地域文化拠点として、現在市内18区中10区に区民文化センターが設置され、市民が身近な地域で芸術に触れる機会を創出しています。今後さらに3区で整備される予定です。

今回は2019年8月～10月にかけて横浜市内の区民文化センター10か所に対して、来館時の障害者への対応状況や、過去の公演や展示、教育普及プログラムにおける障害者の鑑賞・参加状況を聞き取る実態調査を行い、共通課題を抽出しました。

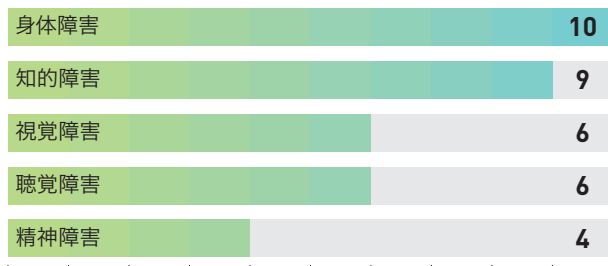
対応について

① 障害者が施設を利用したことがありますか。

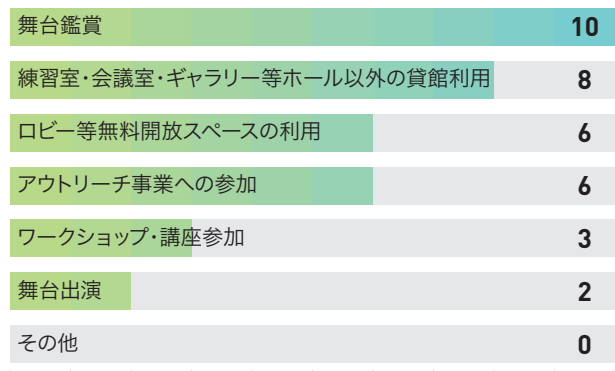
はい	いいえ
10	0

※上記で「はい」と答えた方は以下をお答えください。

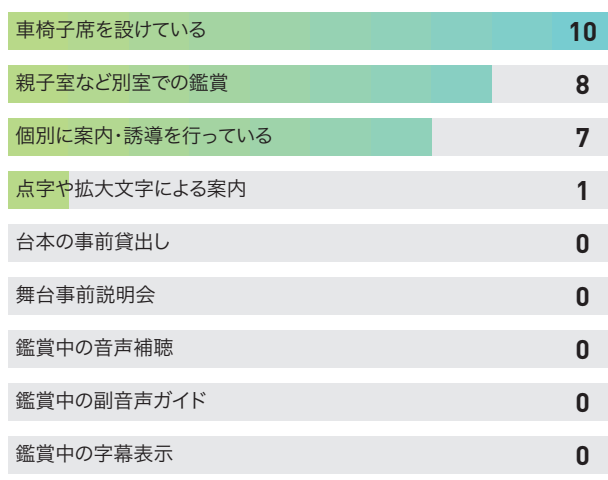
1-1. どのような障害を持った方ですか。(複数回答可)



1-2. 利用内容についてお答えください。(複数回答可)



② 舞台の鑑賞にあたって、障害者へ行っている鑑賞サポートの実施状況について教えてください。(複数回答可)



2-1. 主催公演において、
障害者割引を適用していますか。

はい	いいえ	検討しているが難しい
0	10	0

※区内在住者や60歳以上などを対象とする区民割引に、障害者も適用している施設が2ヶ所あった。

2-2. サポートを求められ、対応に困ったりしたことがありますか。……………

はい	いいえ
6	4

「はい」の具体的な内容

- フラットタイプの大きな車椅子は通常のエレベーターに乗れず、搬入口を案内したことがある。
- 全席自由席の公演で「足が不自由なので席を確保しておいてほしい」と言われたが、他の高齢者との平等性が気になった。
- レクチャーコンサートに中途聴覚障害者が参加した。手話通訳をつけていたが、手話が分からず途中退席した。
- 障害特性上不随意に声が出てしまう人を、子ども向けワークショップに招待した際、他の観客よりアンケートで苦情を書かれてしまった。
- 杖を倒してしまった音で、観客同士でトラブルになったことがある。
- クラシックコンサートの公演中に声が出てしまう観客があり、他の観客より意見が出た。
- コンサート中に電動車椅子の電子音が気になることがあり、スタッフが声を掛けた。

「いいえ」の具体的な内容

- 介助者がついていないためサポートの必要がない。
- 体調などの理由から、途中退出することが多い。
- 呼吸器の音を気にする観客がいるのではと思うことがあるが、特にクレームなどなく、観客の理解は進んでいると感じる。

③ 窓口、受付等で行っている障害者への対応についてお答えください。(複数回答可)

車椅子の貸し出しを行っている	10
電話・ファックス・電子メールなど、受付方法を多様化している	10
筆談での対応を行っている	7
案内を視覚的に伝えるコミュニケーション支援ボードを設置している	1
その他	1
手話のできるスタッフを配置している	0

「その他」の内容

- サービス介助士の資格を持つスタッフがいる。
- 老眼鏡の貸出を行なっている。

3-1. サポートを求められ、対応に困ったりしたことがありますか。……………

はい	いいえ
6	4

「はい」の具体的な内容

- トイレの介助を求められた。
- 杖を使用しているため入り口まで来て手伝ってほしいと頼まれ、対応した。
- 視覚障害者より、駅からのアクセスが分かりづらく、迎えに来てほしいという要望があり、対応した。
- 貸館の当日の利用説明を口頭で行っていたが、聴覚障害者より「わかりづらい」と意見があり、視覚的に分かりやすいよう確認事項を一覧表にして渡した。
- 知的障害者が何度も受付に来ることがあり、警備に対応を求めたことがある。
- ロビーで絵を描いている人がいたが、見守った。
- 精神障害があると思われる人がロビーの棚の上で寝そべっていることがあった。声かけをして対応した。
- 障害当事者より介助者分の割引や招待券があると良い、という意見があった。

④ 舞台鑑賞、窓口・受付対応以外の場面において
障害者からサポートを求められ、対応に困ったりしたことがありますか。

はい	いいえ
4	6

「はい」の具体的な内容

- ダンスワークショップの参加者に聴覚障害者がいたが、申し込みの時点で知らされていないだったのでフォローができなかった。
- 障害児の親より「バイオリン教室を探している」という相談を受けて、貸館を利用している地域のサークルの紹介をしたことがある。
- 精神障害者がよく来館していた。調子が悪くなり入院していた時に、医療・福祉関係者が今後の支援を検討する会議に出席を求められ、参加したことがある。

⑤ どのような要素があれば、障害者へのサポートを実施できると思いますか。(複数回答可)

障害者へのサポートに関するノウハウ	5	<p>「その他」の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ●他の観客に対する配慮の仕方。 ●障害者へのサポートについての相談先が欲しい。 ●近隣の福祉施設に出かけて顔見知りになり、施設職員に対応方法を教えてもらいたい。 ●障害者と接する機会。まずは来てほしい。 ●受付と事業担当者のつなぎ。対応の差がある。地域とのつながりを深めるコーディネーターのような役割を設置できると良い。 ●視覚障害者への案内の仕方。点字テプラを用意しているが、どこに表示したら適切なかわからない。 ●コミュニケーションボードやサービスのガイドライン等、区民文化センター間で共有できるツール。スタッフの対応意識の土台があると良い。 ●市や区で設備面でのバリアフリーの基準を決めてほしい。
予算	4	
福祉関係団体との連携	3	
人員体制	1	
施設・設備のバリアフリー化	0	
その他	7	

⑥ 障害者へ公演情報を届けるために、取り組んでいることはありますか。

はい	いいえ
5	5

6-1. 具体的に取り組んでいることは何ですか。(複数回答可)

障害者団体・行政機関を通じた情報発信	4	<p>「その他」の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ●チラシなどの案内の文字にUDフォントを使用している。
障害福祉サービス事業所や特別支援学校等への情報発信	0	
福祉関連のメディアへの情報提供	0	
音声コードの活用	0	
色覚障害対応チラシの作成	0	
ルビ付きチラシの作成	0	
白黒反転チラシの作成	0	
点字チラシの作成	0	
その他	2	

6-2. どのような要素があれば、障害のある人への広報が実施できると思いますか。(複数回答可)

障害者へ情報を届けるノウハウ	3
福祉関係団体との連携	1
予算	0
人員体制	0
その他	1

7. ウェブサイト上のサポートで取り組んでいることはありますか。.....

はい	いいえ
5	5

※上記で「はい」と答えた方は以下をお答えください。

7-1. 具体的に取り組んでいることは何ですか。(複数回答可)

ウェブアクセシビリティ方針を策定している	4
文字の大きさを変更できる	1
バリアフリー情報ページがある	1
音声読み上げに対応している	0
白黒反転ページがある	0
その他	1

「その他」の内容

- 文字の大きさ、文章の分かりやすさに配慮している。

8. 障害者の対応に対しての研修を受けたことがありますか。.....

はい	いいえ
7	3

8-1. 「はい」の場合 どのような研修内容ですか。
(複数回答可)

障害者への対応や待遇	6
障害者差別解消法について	3
障害者が参加していることを想定した危機管理・避難訓練	0
障害者も参加できる事業づくり	0
スタッフの意識啓発	1
その他	1

「その他」の内容

- 障害当事者を招いた講座。

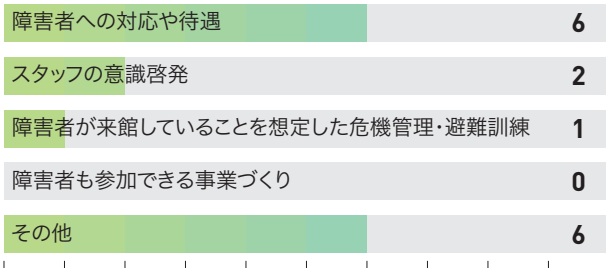
8-2. 「いいえ」の場合 どのような要素があれば、
研修を実施したいと思いますか。(複数回答可)

研修内容に関するノウハウ	3
人員体制	0
福祉関係団体との連携	0
予算	0
その他	1

「その他」の内容

- 他の区民文化センターと連携。
全館で共通した内容の研修があるとよい。

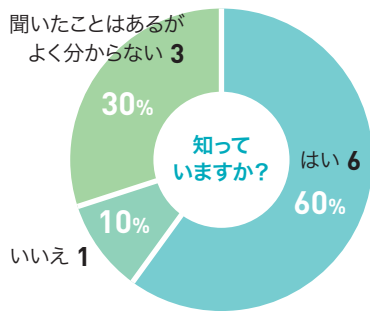
⑨ 今後の障害者に対するサポートや理解に関する研修には、どんな内容が必要だと思いますか。(複数回答可)



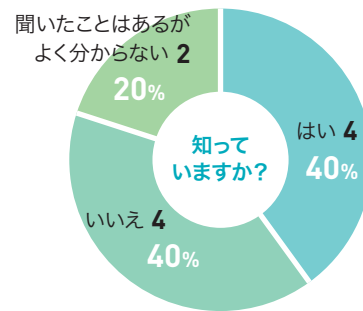
「その他」の内容

- 障害当事者を招いて話を聞く。
- 障害者のニーズ把握。
- 手話や外国語の習得。
- 他の区民文化センターと連携して、障害者対応についてや、情報共有を行なう。
- 広報ノウハウ、ネットワークのつくり方。
- 今年度、障害者が参加していることを想定した防災についての研修を行う予定。防災介助士の資格取得も検討している。
- どんな知識が必要なのか知りたい。

⑩ 障害者差別解消法について知っていますか。



⑪ 障害者文化芸術活動推進法について知っていますか。



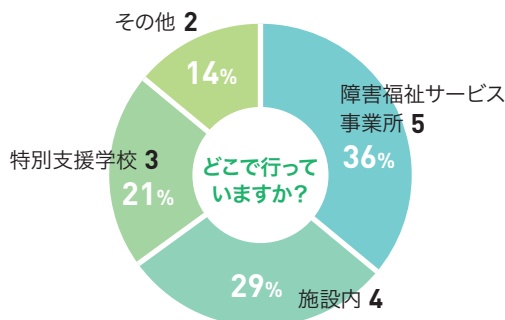
事業について

① 障害者を行う芸術活動に対して、施設として興味・関心がありますか。

ある	ない	すでに行っている
2	0	8

※上記で「すでに行っている」と答えた方は以下をお答えください。

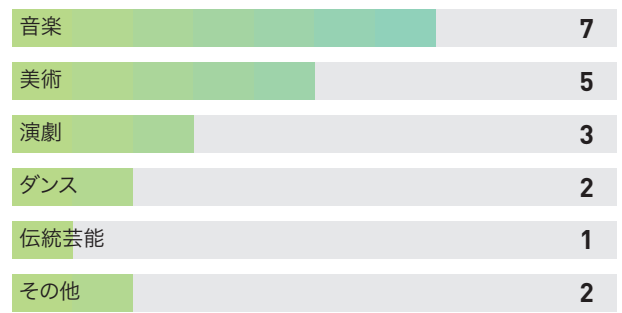
1-1. どこで行っていますか。(複数回答可)



「その他」の内容

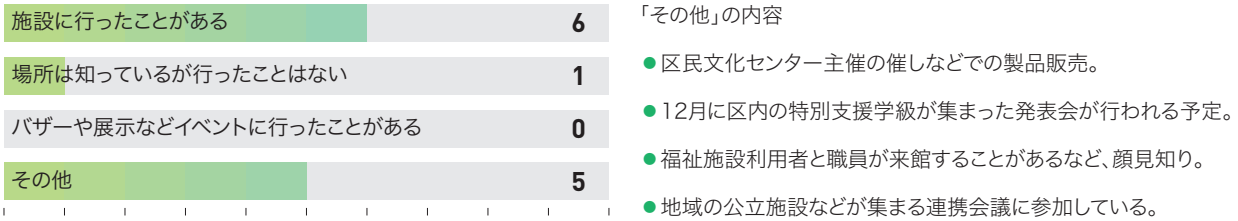
- 地域ケアプラザ (地域の福祉・保健の拠点を担う横浜市独自の施設)

1-2. どのような内容ですか。(複数回答可)

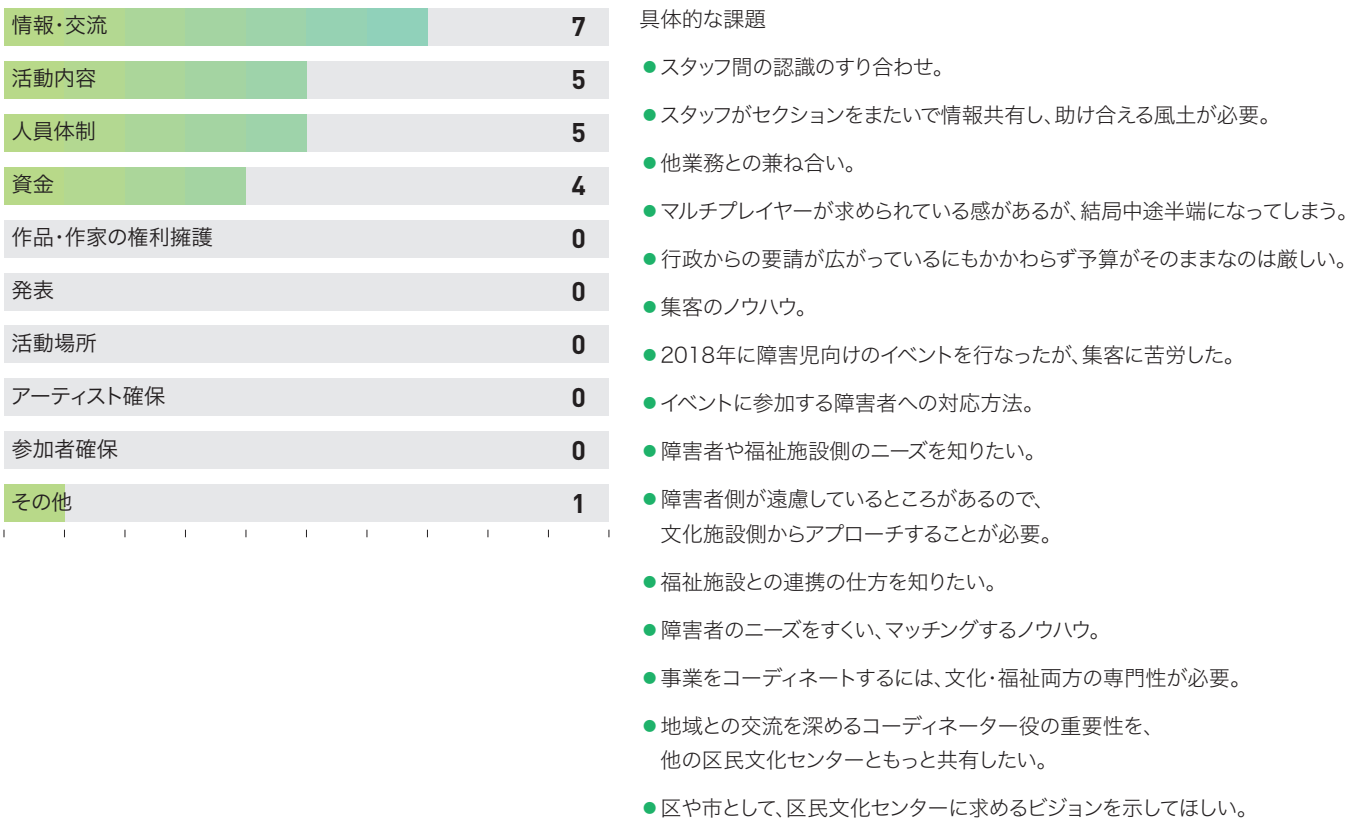


「その他」の内容 ● パントマイム ● 紙芝居

② 貴施設の近隣にある障害福祉関連施設と、面識やつながりがありますか。(複数回答可)



③ 障害者と芸術活動を行ううえでの課題はなんですか。(複数回答可)



設備について

① ホールの規模はどれくらいですか。
(ホールが複数ある場合は合計)

客席数 500席以上	客席数 499～300席以下	客席数 299席以下
2	8	0

② 貴施設にある設備についてお答えください。
(複数回答可)

車いす席	10
貸出用車椅子	10
車椅子対応エレベーター	10
AED	10
親子室などの観覧室	8
多機能型トイレ	8
障害者用駐車場	9
授乳室	6
点字ブロック	5
Wi-Fi設備	5
筆談ボード	3
コミュニケーション支援ボード	1
音声案内装置	1
聴覚障害者向けの舞台鑑賞用サポートシステム(字幕)	1
ワイヤレス補聴システム	1
受付・公演会・会議等における音声表示システム	0
いす式階段昇降機	0
スロープ	0
体感音響システム	0
視覚障害者向けの舞台鑑賞用音声ガイドシステム(音声ガイド)	0
上記以外	7

上記以外の内容

- 貸出用老眼鏡
- 多目的トイレ
- 点字テブラ
- 災害時の対応を考え、いす式昇降機の導入を検討している。

③ ホール内に補助犬を同伴できますか。

はい	いいえ	検討しているが 設備上難しい
10	0	0

④ 階段手すりやリフトの設置など、障害者が支障なく
客席に移動できるような配慮をしていますか。

はい	いいえ	検討しているが 設備上難しい
9	0	1

「はい」の具体的な内容

- フラットで移動ができる。
- スタッフが付き添う体制がある。
- ホール客席内の階段に手すりをつける。

⑤ 階段手すりやリフトの設置など、障害者が支障なく
舞台に移動できるような配慮をしていますか。

はい	いいえ	検討しているが 設備上難しい
10	0	0

「はい」の具体的な内容

- フラットで移動ができる。
- ステージが昇降する。
- エレベーターがある。



横浜市区民文化センターにおける 障害者へのバリアフリー対応に関する 調査結果を受けて

1. 障害者の施設利用について

すべての区民文化センターで、障害者の利用があり、舞台鑑賞や貸館利用の常連客がいるという回答も多くありました。ロビーに置かれているチラシを見に来る、トイレなどの休憩に立ち寄るなど、日常生活の中での居場所となっていることもうかがえます。

2. 舞台鑑賞のサポートについて

鑑賞中のサポートについては、字幕表示や音声ガイドなどの機器を使ったサポートをしている文化施設はなく、車椅子席の用意や親子室の使用など、鑑賞しやすい環境を整えるサポートをしていました。しかし、「サポートを求められて困ったこと」の内容を見ると、障害当事者に対してではなく、周囲の観客とのトラブルに関する内容が多く見受けられます。文化施設側が障害者を受け入れる準備をしていたとしても、当日来館している他の観客が、障害者に対する理解があるとは限りません。ファミリーコンサートや乳幼児向けのコンサートなど、ある程度声や音を出して鑑賞できる内容の公演へ障害者が来るという回答もあり、障害者もその他の観客も、お互いの合意が取れるなど、心理的なバリアを取り除く方法の検討が求められていると感じます。

3. 窓口、受付等でのサポートについて

「視覚障害があり、アクセスのサポートをしてほしい」など、個性の高い対応を求められた場合には、柔軟に対応していることがうかがえます。一方で、障害者から事前に必要なサポートの情報がなかったため準備ができず、適切な対応ができなかった例もあります。文化施設側が、サポートの相談に応じる姿勢を示すなど、お互いがコミュニケーションを取りやすくするための工夫が必要であると感じます。また、対応に困ったときに相談する窓口や、文化施設共通の対応マニュアルなどの仕組みがあると、文化施設側も安心して障害者を受け入れられるのではないかと思います。

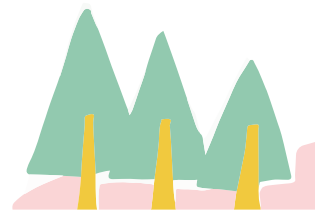
4. 障害者を行う芸術活動について

アウトリーチ事業で福祉施設に出かけていたり、文化施設のお祭りで福祉施設が出店したりと、8割の施設が近隣の福祉施設と何らかの関わりを持っていました。しかし、事業を行なううえでの課題としては「情報・交流」が最も多く聞かれました。「障害当事者・福祉施設側のニーズを知りたい」という意見もあり、面識はあるものの具体的な事業につなげる一歩を躊躇している印象があります。また、聴覚障害者向けのコンサートや発達障害児向けのワークショップなど、障害者向けの企画を行なう時に、集客が難しかったという回答もあり、広報の課題も大きいと思われます。

5. 障害者割引について

障害者割引を適用している施設はありませんでした。障害当事者から割引の要望もありますが、もともとのチケット料金設定を安くしているなかで現状以上に値下げすることは、文化施設側の負担が大きいのという回答がありました。

横浜市区民文化センター職員 との意見交換



日時：2019年11月20日(水) 15:00~17:00

場所：障害者スポーツ文化センター 横浜ラポール（神奈川県横浜市港北区鳥山町1752） 参加者：8名

ヒアリング調査にご協力いただいた10館の区民文化センターのみなさんにお声がけし、調査結果を受けての意見交換の機会を設けました。当日はそのうちの6館から参加していただき、それぞれの施設で、障害などさまざまな状況の人たちにどのような配慮をしているのか共有しました。また、ホールに来づらいと感じている人たちに対して、施設側にどのようなことがあればよいのか、みなさんと意見を交わしました。



まずは、会場となった横浜ラポールで文化事業課に所属している和田剛さんより、施設について説明をしていただきました。横浜ラポールは、身体障害のある人などが、リハビリもかねてスポーツや陶芸などの文化活動に親しめるように、1992年に建てられた施設です。施設内には点字ブロックが敷かれていたり、車椅子が何台も乗れる大きなエレベーターがあったりと、障害のある人たちが使いやすいような配慮がされています。「障害のある人が社会参加する一歩として、まずは横浜ラポールを利用してもらい、ゆくゆくは身近な地域でスポーツや文化活動を楽しんでほしい」と和田さんは話しますが、実際は「ラポールだったら行けるけど、他の施設は行きづらい」という方が多いそうです。地域にあるスポーツ施設や文化施設が、障害のある人にとって身近な存在になることが求められています。

次にSTスポット横浜から、ヒアリング結果を元に各施設のバリアフリー状況を報告しました。さらに参加者から、鑑賞や受付の場面での困りごとや、対応の工夫などの事例をお話していただきました。障害の有無による困りごとだけではなく、高齢者や子どもなど多様な人が集まるなかでは、音やにおいなど観客同士で気になってしまうことがあるそうです。広報の段階で乳幼児も鑑賞できるコンサートであること

を明記するなど、さまざまな状況を持つ人がいることを観客に知らせ、理解を求める工夫をしているというお話もありました。

さらに、障害のある人が来やすく、また区民文化センターも受け入れやすくなるために、どのようなことがあればよいのか、参加者のみなさんと考えました。まずは、それぞれの施設で行っている対応の事例集のようなものを作って、ノウハウの共有ができないか、という意見がありました。各施設ごとで当たり前に行なっている対応を、他の区民文化センターに行ったときには受けられず、困ることもあるかもしれません。また、障害のある人の中には、自分は利用できないのではないか、と考えている人もいるかもしれないので、バリアフリー情報などをまとめた冊子を作成し、市内の福祉関係施設で配布するのはどうか、という意見もありました。

今回提案があった意見も踏まえて、障害のある人が身近な地域の区民文化センターに気軽に出かけられるように、具体的なツールを作成することを検討しています。区民文化センターの職員も、障害のある人も、その他のお客さんたちも、気持ちよく過ごせるために歩み寄りきっかけづくりをしたいと思います。



視覚障害者にとっての文化芸術とは

日時：2019年12月17日(火) 10:00~12:00 場所：神奈川県ライトセンター（神奈川県横浜市旭区二俣川1-80-2）

聞き手：柏本友美子・福谷優希（横浜市旭区民文化センター サンハート）、田中真実・川村美紗（STスポーツ横浜）



神奈川県ライトセンター



書庫には点字・録音図書がずらりと並ぶ



施設内には触れる彫刻がある

今回の調査は、区民文化センターの職員から見えている障害のある人の利用状況を聞き取りました。では、障害当事者のみなさんはどのように感じているのでしょうか。今回は視覚障害のある人のための福祉施設である神奈川県ライトセンターの職員2名に、視覚障害のある人たちの生活についてお話を伺いました。ヒアリングはライトセンターのすぐ近くにある、横浜市旭区民文化センターサンハートの柏本友美子さんと福谷優希さんともに行ない、お互いの施設を知り合う機会ともなりました。

ライトセンターは神奈川県が設置し、指定管理者として日本赤十字社が運営する施設で、視覚障害のある人に関する支援などを幅広く行なっています。体育館や茶室など、スポーツや文化活動に取り組める設備も整っており、クラブ活動も盛んです。サンハートにも、ギャラリーでの俳句の発表や、ホールでの音楽鑑賞などで利用している人も多くいるそうです。対応してくださった職員のお二人が所属している支援課では、途中で視覚障害を持った人から相談を受け、白杖歩行訓練や日常生活動作訓練などの支援をしています。実は生まれつき視覚障害がある人よりも、途中で、特に50歳以上で視覚障害になる人の方が圧倒的に多いそうです。慣れ親しんだ駅までの道のりや、家の中で行っていた家事なども、視力を失った状態ではひとりで行なうことが難しくなってしまうため、いっしょに練習をしながら支援します。

ライトセンターでは、情報提供事業も大きな役割のひとつとなっています。点字、録音や拡大図書を揃え、貸し出しています。現在はパソコンなどを使って情報を得る視覚障害のある人も増えてきており、デジタル機器を使えない人との情報格差も課題のひとつです。また、ツールの問題によらず、見えないことによって興味のきっかけを失ってしまうことも大きく、引きこもり状態になってしまう人もいます。

最後に、文化施設を訪れるときにあったら良いことは何か、ご自身にも視覚障害がある職員のお一人に聞いてみると、「一番のハードルは会場に辿り着くことです」と教えてくれました。外出時の移動を支援するヘルパーは、すぐに手配できるわけではないので、早めにイベントの情報が届く必要があります。また、例えばビル入り口から会場までの案内など、文化施設のスタッフがができる範囲での誘導があるとありがたいという話もありました。

お話しを通して、視覚障害のある人にとって情報の届き方がとても重要になることを感じました。見えない・見えにくいことによって情報の選択が難しくなったときに、生活の楽しみが狭まってしまう人もいます。そのとき、文化芸術が好奇心を引き出すきっかけのひとつになるとよいと思いました。

施設名 神奈川県ライトセンター
指定管理 日本赤十字社
所在地 神奈川県横浜市旭区二俣川1-80-2
URL <http://www.kanagawalc.org>

神奈川県内における障害者の文化芸術活動に関するヒアリング結果報告

ここでは、神奈川県内の障害福祉団体8団体、文化芸術団体3団体、自治体3団体に対するヒアリング結果をお伝えします。

分野に関わらず、情報共有の場や相談できる関係など、つながりが必要とされていることがうかがえます。

障害福祉と文化芸術を横断するようなネットワークの構築を今後も続けていきます。(調査期間:2019年4月9日~2019年12月17日)

現在取り組んでいる または これまで取り組んできた活動

障害福祉団体

音楽好きな利用者が多く、一か月のうち半分程度を音楽活動に充てている。職員が楽器を弾いたり歌をうったりしている。

地域のボランティアが多く訪れ、文化芸術活動に関わっている。多くの利用者は施設内、家庭内に人間関係に限られるため、さまざまな人と関わる機会となっている。

文化芸術団体

養護学校を含む、市内外の小学校からの見学を受け入れている。昨年度は、市内にあるアート活動が盛んな障害者施設の利用者を講師にしたワークショップを行なった。

ホール設備や周辺のバリアフリー状況を整備する取り組みを続けている。当事者の声を聞きながら、不明なことは近隣の社会福祉協議会などに専門的なアドバイスを求めて、できることから少しずつ進めている。

自治体

障害福祉の担当課では施設が主催するイベントの広報・後援協力を行なっている。

障害者向けに特別に文化芸術活動の機会を設けるといよりは、既存の市民芸術祭などに障害者が参加することができるようにと考えている。

今後の課題、要望

障害福祉団体

大きなイベントだけではなく、日常的に障害者が文化芸術活動に参加できる機会がもっとあるとよい。

意思の発信が難しい人の表現をどう汲み取るか、日頃の支援の中でも課題となっている。

文化芸術団体

福祉施設とつながりたいと考えたときに、どこに声をかけたらよいか悩む。先行する調査研究があると参考になる。

自治体

障害福祉、文化芸術にまたがる事業をコーディネートする人材やノウハウが不足している。

ヒアリング先一覧

障害福祉団体 (8団体)	スプラウト、おあしす湘南(以上平塚市) / アガベサポートセンター(座間市) / 地域活動支援センター みらまーる(茅ヶ崎市) / 地域活動支援センター ひふみ、みどり福祉ホーム、リエゾン笠間、神奈川県ライトセンター(以上横浜市)
文化芸術団体 (3団体)	平塚市美術館(平塚市) / 茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団(茅ヶ崎市) / 神奈川県民ホール(横浜市)
自治体 (3団体)	平塚市(障がい福祉課、文化・交流課) / 茅ヶ崎市(障害福祉課、文化生涯学習課) / 座間市(障がい福祉課、生涯学習課)

障害福祉と文化芸術の 関わりを考える勉強会

“わたし”と“あなた”の関係づくり

昨今、文化芸術の分野においては、障害のある人を含む多様な人たちや地域と関わることについて、多くの注目が集まっています。この勉強会では、障害福祉と文化芸術がお互いにとってより身近な存在となることを目指して、ダンスを通じたコミュニケーション、障害者差別解消法の考え方、障害のある人の舞台芸術表現を支える実践、精神障害のある人たちのネットワークづくりについて、ゲストを招いてお話を伺いました。

アーティストやコーディネーター、障害福祉や文化芸術関係者のみなさんなど、さまざまなバックグラウンドを持つ人にご参加いただきました。ここからは、各回の勉強会の様子をご紹介します。

身体と身体の出会い

上村なおか（ダンサー・振付家）

日時：2019年9月27日(金) 14:00～16:00

場所：ミュージア川崎シンフォニーホール 市民交流室（神奈川県川崎市幸区大宮町1310 4F） 参加者：18名



自分と他人の身体を確かめる

第1回のゲストは、ダンスを通して障害のある人との関わりを続けている、ダンサーの上村なおかさんです。参加者のみなさんにも実際にダンスワークショップを体験していただきながら、ふだん上村さんがどのように身体を通して目の前の人と関わっているのか、紐解いていきました。

STスポット横浜から上村さんのご紹介をした後、早速ワークショップに移ります。「いつも“そこにある身体とどう関わるか”を考えています。」という上村さん。まずは、今の自分の身体の状態を確かめます。裸足になった足の裏、手の平など身体中のあらゆる部分で、床や壁など会場にあるいろんな素材を触ってみます。さらに、自分の身体の輪郭をなぞるように撫でてみたり、床を転がりながら声を出してみたり。感触や声の響きを通して、空間の中に身体がどうあるのか探っていきました。

自分の身体に意識を向けた後は、他人の身体に意識を移していきます。参加者のみなさんは目を瞑り、上村さんが手を叩く音や周囲の人の動く気配を頼りに、その方向に移動します。上村さんにぐっと近づく人、少し離れた位置を保っている人、それぞれ違う距離感です。そこから一気に距離を縮めて、今度は全員で身体を寄せ合います。隣の人の身体に自分の身体をくっつけて、ふだんは意識しない体温や鼓動、息遣いを感じました。



関係から生まれるダンス

後半は2人1組でのワークです。まずは、相手の視線を読み取って、同じ場所を見てみます。直接相手の目を見て視線を辿ったり、身体の向きから察したり…。さまざまな方法で相手の身体になるうとしていました。「次は会話のように、話す身体と聞く身体でおしゃべりしてみましょう」と上村さん。手を合わせて鏡のように向き合って、相手に体重をかけ合います。さらに、今度は触れていた手を離して、身体に触れていないけれども繋がっているイメージで、動きのキャッチボールを続けます。「振付けを踊るダンスの楽しさもありますが、今日みなさんに体験していただいたダンスは、生み出すダンスです」という上村さんの言葉どおり、2つの身体が影響し合うことで、思いもよらないダンスがあちこちで生まれていました。

参加者のみなさんは、それぞれ名札を貼っているものの、最後まで自己紹介をしていません。それでも親密な雰囲気の中で活動が続いていました。終わりに感想をシェアした時に、「触れてみて、その人のことが分かることが多かった」と話す参加者もいました。

そこに存在する身体が関わり合ってダンスが生まれる。コミュニケーションとしてのダンスの豊かさを実感する時間となりました。



上村なおか
(うえむら・なおか)

1991年お茶の水女子大学舞踊教育学科卒業。95年より自作ソロダンスを開始。2009年より十条にある「ヴィ街なか」にて、障害の有無に関わらず参加できるダンス教室で講師を務める。12年からはSTスポット横浜とともに特別支援学校や福祉施設に出かけ、障害児・者との関わりを続けている。第36回舞踊批評家協会新人賞受賞。桜美林大学芸術文化学群講師。

障害のある人との向き合い方～合理的配慮って？

又村あおい（全国手をつなぐ育成会連合会政策センター委員・内閣府障害者差別解消法アドバイザー）

日時：2019年10月23日(水) 19:00～20:30

場所：STスポット（神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1F） 参加者：27名



障害者差別解消法とは

建物などのバリアフリー化が整いつつある中、2016年には障害者差別解消法が施行され、さらに心のバリアフリーが推し進められています。とはいえ、目の前に困っている障害のある人がいた時に、どう手助けすればよいのか悩む場面もあるかもしれません。今回は、障害者差別解消法の策定にも関わった又村あおいさんをお招きして、事例も交えながら法律を読み解いていただきました。

まず、障害者差別解消法が制定された背景からお話いただきました。この法律は、2006年に国際連合で採択された「障害者権利条約」に、日本が批准するにあたって整備された法律です。「障害は、社会の側の障壁（バリア）によるもの」という障害の社会モデルの考え方に基づいて、障害の有無に関わらず、気持ちよく生活できる社会（共生社会）の実現を目指しています。又村さんに法律の文言を解説していただき、具体的には「不当な差別を禁止する」「障害のある人から障害ゆえの社会的な障壁を取り除いてほしい、という訴えがあったときに、負担のない範囲で合理的な配慮を行なう」ということが求められていると分かりました。

合理的配慮のポイントは対話

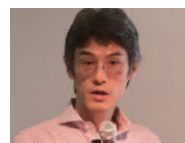
では、どのようなことが不当な差別や合理的配慮になるのでしょうか。不当な差別とは、障害を理由として、正当な理由なく障害のある人を差別的に取り扱うことです。「心疾患があり、命の危険性がある人のジェットコースターへの乗車を断る」「どうしても大声が出てしまう人のコンサート鑑賞を断る」など、本人や第三者の命や権利を守る必要がある＝正当な理由がある場合の対応は、必ずしも障害者差別とは言い切れません。

合理的配慮を行なうには「片方の主張だけを優先するのではなく、対話によってお互いに折り合うところを探ることがポイントです」という又村さ

ん。例えば「聴覚障害のある人から手話でのコミュニケーションを求められたが、手話が分からないので筆談での対応でもよいか本人と相談した」という場合は、先方の希望どおりに対応はできないけれど、「筆談」という代案を提示したことが合理的配慮になります。「きっと劇場などでふだん行っている接客サービスの範囲だと思います」という又村さんの言葉通り、必要以上に身構えなくてもよいように思えます。

前述のジェットコースターの乗車やコンサート鑑賞を断られた人も、もし刺激の少ない乗り物を紹介したり、周囲を気にせず鑑賞できる個室に案内したりすることができれば、その時間を楽しむことができるかもしれません。差別をしない、ということから一歩進んで、お互いに対話の回路を開けると、より豊かな社会になるのではないかと思います。

もともと、文化芸術にはさまざまな異なりを含む包容力があるはずで、文化芸術をきっかけとして、障害のある人もない人も、さまざまな背景や気持ちを持っている人が一緒に過ごせる場が、あちこちで生まれるとよいと思いました。



又村あおい
(またむら・あおい)

神奈川県平塚市福祉総務課地域福祉担当所属。1995年平塚市役所へ入庁し、99年より8年間障害福祉課に在籍。神奈川県庁、内閣府への出向を経て、2015年より現職。内閣府の障害者差別解消法アドバイザー他、数多くの障害者団体の委員、構成員、講師等を務める。障害児者福祉制度全般、障害児者支援を通じた地域づくりなどが主な活動分野。

創作活動を支えるために

野崎美樹（NPO法人スローレーベル インクルーシブ・プロジェクトマネージャー）

日時：2019年12月5日(木) 14:00～16:00

場所：横浜市旭区民文化センター サンハート ミーティングルーム(神奈川県横浜市旭区二俣川1-3二俣川ライフ5F) 参加者：21名



人と人が出会うなかで生まれるモノ

障害のある人とさまざまな分野で活動するアーティストを繋いで、新しいアートを創造・発信し続けているスローレーベル。ゲストの野崎美樹さんは、障害のある人の創作活動をサポートする「アクセスコーディネーター」「アカンパニスト」の人材育成に取り組んでいます。2014年より開催している国際アートフェスティバル「ヨコハマ・パラトリエンナーレ」のお話を中心に、「障害とは何か」「障害のある人の創作活動を支えるためにできることは何か」、参加者同士のディスカッションを交えながら考えてきました。

スローレーベルの活動は、横浜市の福祉施設とアーティストを繋いで商品を作る「横浜ランデヴープロジェクト」をきっかけにして始まりました。その中で、商品が売れるほど量やスピードを求められるなどの問題に直面します。そこで、市民参加型のワークショップなど、アートや表現に重点をおいた活動にシフトしていくことになりました。野崎さんは「創作を通して、次第に障害者の有無という枠組みを超えた関係性になっていった」と話します。「人と人が出会うなかで生まれるモノを見てみたい」という思いから、ヨコハマ・パラトリエンナーレの開催に至りました。

誰もが「アクセスコーディネーター」に

サーカスなどパフォーミングアーツのワークショップを企画するも、初年度は障害当事者に参加してもらえず、彼らの抱えるさまざまなバリアが浮き彫りになりました。そこで物理的バリア(エレベーターの有無や情報が届かないなど)や心理的バリア(自分でできるのかという不安など)によって表現活動を諦めることがないよう、参加できる環境を整えるための2つの役割をつくり、人材育成に取り組み始めました。どんなサポートがあれば参加できるか本人と対話し、必要な情報を届けたり、その日の身体と心の状態を把握したり、彼らの不安を取り除く「アクセスコーディネーター」。

同じアーティストの立場で作品づくりに関わり、彼らの可能性と一緒に広げる「アカンパニスト」。彼らの存在によって、今までは参加できなかった人が参加できるようになりました。

そして役割を作ることで、社会に向けて障害のある人が求めていることが可視化されたこと、障害があっても気兼ねなく参加してよいというメッセージを示せたことも大きいと言います。「福祉の専門でない人も、アクセスコーディネーター的の態度を持てる社会になれば」という野崎さん。まずは目の前の人とことん向き合っ対話をするのが、未来の新しい表現や創作活動に繋がっていくのではないかと思います。



野崎美樹
(のざき・みき)

英国で美術館教育を学ぶ。

2011年よりアーツ前橋(当時、前橋市美術館開設準備室)に学芸員として勤務後、川崎市岡本太郎美術館の教育普及担当学芸員を経て、2015年8月より現職。障害の有無にかかわらず市民を巻き込んだプロジェクト型作品の制作、アートの現場のアクセシビリティ向上のための研究・人材育成に取り組む。

障害のある人の声をきく

堀合悠一郎・堀合研二郎・みずめ (YPS横浜ピアスタッフ協会)

中村麻美 (地域活動支援センターひふみ 施設長)

日時：2020年1月27日(月) 19:00~20:30 場所：STスポット (神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1F) 参加者：26名



今回は、横浜市内で精神障害のある人たちのネットワークを作っている、YPS横浜ピアスタッフ協会(以下YPS)のみなさんをお招きしました。堀合悠一郎さん、堀合研二郎さん、みずめさんはご自身も精神障害がある当事者、中村麻美さんは精神障害のある人の居場所を運営する福祉施設職員という立場で活動に関わっています。活動の中心となっている「ピアスタッフ」とは何か、というお話から、みなさんにとっての文化芸術活動との関わりについて、お話を伺いました。

関係をなだらかにするピア活動

「ピア」とは平等や対等を意味し、ピアスタッフとは障害のある人が雇用契約を結んで、障害のある人の支援をする仕事を指します。一般的な職場では精神障害に対する偏見や賃金の低さなど、まだまだ働きづらさがあるなか、「精神障害のある人が、健常者の職員と同じ条件で働ける環境を整えることが仕事です」と悠一郎さんは話します。また、劇場勤務を経て福祉の世界に飛び込んだ中村さんは、「健常者＝支援者、障害者＝利用者という構図が当たり前になっていることに違和感があった。健常者だって良い支援者とは限らない。」と考えてきたときに、ピアスタッフの活動を知り、感銘をうけたそうです。

こうしたピアスタッフの活動や概念を広げるために、2017年にYPSの活

動が始まりました。活動に参加するためにルールはなく、精神障害の有無も問いません。精神障害に関する勉強会や啓発活動を通して、当事者、福祉関係者、医療関係者など分断されていた人たちと「まずは仲良く」なり、関係をなだらかにしてきました。

表現がつくる対等な関係

後半では、YPSにとっての文化芸術との関わりについて伺いました。ジャグラーとしても活動しており「気持ちが塞ぎこんでいても、パフォーマンスとして表出できる貴重な存在」と話すみずめさんは、YPSの活動の中で「イソット」という年4回の一芸発表会の企画運営を担当しています。「みんながイキイキできるにはどうすればよいのか、と考えサポートした結果、その人らしい表現が生まれる」と、仲間の魅力を引き出し伝える手段として表現活動があると話します。

他にも、YPSではシンポジウムや舞台発表を通して精神障害への理解が深まるよう伝えていく「ピアまつり」を開催しています。「ピアまつりでは、舞台上に立っている人だけではなく、観客席に座っている人も一緒に場を作り、参加している雰囲気がある」と中村さん。YPSのみなさんが大切にしている対等な関係づくりは、文化芸術をおもしろくするヒントでもあるように感じました。



横浜ピアスタッフ協会

2015年横浜がピアスタッフの生まれやすい街になることを目的に精神障害当事者、支援者中心に設立される。横浜を拠点にしながらも、横浜以外の地域からの参加も多く、精神障害者、会社員、家族、支援者などさまざまな立場の人が共に活動している。活動のモットーは「仲間(ピア)」を何よりも大事に思うこと、そして常に「楽しさ」を求めること。



中村麻美
(なかむら・あさみ)

2005~2012年まで世田谷パブリックシアターの学芸に所属し、劇場内・地域におけるワークショップ活動を主に担当。2012年より横浜市神奈川区にある「地域活動支援センターひふみ」で精神障害のある人たちの日中活動の場を運営。劇場勤務時代に体得した、地域のさまざまな人との関わりや場の作り方などを活かしつつ、日々試行錯誤している。



障害福祉と文化芸術の関わりを考える 福祉施設/文化施設から見たこと

[調査編] 地域で文化芸術に親しむために

沼部勝（横浜市港南区民文化センター ひまわりの郷 副館長）

和田剛（障害者スポーツ文化センター ラポール上大岡 管理運営課）

日時：2020年2月6日（木）15:20～16:30 参加者：49名

場所：障害者スポーツ文化センターラポール上大岡 地域連携室（神奈川県横浜市港南区上大岡西一丁目6-1 ゆめおおおかオフィスタワー6階）

この報告会では、「横浜市区民文化センターにおけるバリアフリー状況調査」の結果を会場のみなさんと共有しました。

さらに障害者スポーツ文化センターラポール上大岡の和田剛さんと、港南区民文化センター ひまわりの郷の沼部勝さんをお招きして、障害のある人を含むさまざまな人が訪れる地域の文化施設に必要なことは何か、一緒に考えました。



まずは自己紹介も兼ねて、それぞれが所属する施設の紹介をしていただきました。和田さんが所属するラポール上大岡は2020年1月にオープンしたばかりの障害者スポーツ文化センターです。障害のある人が身近な地域でスポーツや文化活動に取り組めるサポートができるよう、地域の関係機関と連携したり、情報発信したりすることを主な役割としています。そしてラポール上大岡と同じビル、すぐ隣の棟に、沼部さんが所属するひまわりの郷があります。音楽ホールなどで区民に芸術鑑賞・発表の機会を提供しているほか、小学校等でのアウトリーチ事業も行なっています。さまざまな取組みの中から、ひまわりの郷で開催されるおまつりで近隣の障害者施設がパンなどを販売した様子や、障害のある子どもたちが通う療育施設に出かけて工作教室を行なった様子など、特に障害のある人が参加した事業を取り上げて紹介していただきました。

続いて、STスポット横浜から「横浜市区民文化センターにおけるバリアフリー状況調査」の結果の一部を報告しました（結果の詳細はP.17～24をご覧ください）。どの施設も障害のある人が訪れたことがあり、求められ

たサポートに対応している一方で、「情報の届け方や、交流の作り方が分からない」という課題が挙がり、なかなか距離を縮められていないことがうかがえます。この結果について、ヒアリングの場にも同席した和田さんは「基本的に歓迎の気持ちはあるが、正しい対応方法が示されているわけではないので、不安の要素の方が強いのでは」と話しました。話題は、対応に迷った時の手助けとなるようなマニュアルがあったらよいのでは、という内容に移ります。和田さんは「一言で“障害がある”といっても、人によって必要な対応は違う」と、その人が求めている対応を聞き取ることが重要としながら、他の区民文化センターでの事例を知るなど、情報共有の機会やツールがあるとよいのではないかと話しました。

近い距離にあるラポール上大岡とひまわりの郷。最後に和田さんと沼部さんは「障害福祉に関わらず、いろいろな形で連携できないか探っていきたい」と、今後の展望を話してくださいました。障害のある人が暮らしている“地域”という視点で、施設や分野をまたいだネットワークづくりが求められています。



沼部勝
(ぬまべ・まさる)

劇場、多目的イベントホールの音響担当を経て、2006年より港南区民文化センター「ひまわりの郷」の運営に携わる。担当するアウトリーチ事業では、区内の市民利用施設や学校、病院等と連携し、出張コンサートなどの実施に取り組んでいる。



和田剛
(わだ・たけし)

2001年より社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団に入職。障害者スポーツ文化センター横浜ラポール文化事業担当を経て現職。障害者の芸術発表の場である「横浜ラポール芸術市場」をはじめとした余暇支援事業を展開している。

障害と身体を めぐる旅 2019

おわりに

障害と身体をめぐる旅に最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

私たちが出会ったさまざまな身体、言葉、風景…。みなさんに届いたでしょうか。

この旅の記録が、みなさんの身近にある身体、言葉、風景を、

これまでとは違う視点で見つめるきっかけとなったのなら嬉しいです。

今回は、福祉施設での芸術家と障害のある人の出会い、文化施設における障害のある人との関わりを中心にご紹介しました。

福祉施設でも、文化施設でも、「その人がそこにいる」ということをどう受け取るのか、そして受け取ったことをどう返すのか、という対話が起こっていたように思います。

そしてその対話を通して、障害の有無に関わらず一人ひとりの身体にさまざまな表現があるのだということに、改めて気づかされました。

そのさまざまな表現の違いや似ているところをお互いに確かめ合えたときに、そこで過ごす時間がより豊かになるのではないかと思います。

これからも、どんな状況であっても文化芸術に触れられる場のあり方を探りながら、さまざまな表現が交差する風景を見つけに、旅を続けていきたいと思います。



「障害と身体をめぐる旅2019」

編集	田中真実、川村美紗	撮影	金子愛帆 (P.4～13)
デザイン	水色デザイン	イラスト	熊本奈津子
印刷	共進印刷	テキスト	川村美紗、鶴田理紗
発行	認定NPO法人 STスポット横浜 〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階		
発行日	2020年3月31日		

文化庁委託事業 令和元年度障害者による文化芸術活動推進事業(文化芸術による共生社会の推進を含む)
「横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム形成事業」

主催:文化庁、横浜芸術文化・障害福祉プラットフォーム事務局(認定NPO法人STスポット横浜、社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団)

P.4～6、P.10～11、P.14、P.27～32の事業については、令和元年度かながわボランティア活動推進基金21・協働事業負担金「地域における障害者の文化芸術体験活動支援事業について」(認定NPO法人STスポット横浜、神奈川県福祉子どもみらい局福祉部障害福祉課、神奈川県国際文化観光局文化課)と一体的に実施

本事業についての問い合わせ

認定NPO法人 STスポット横浜

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビル地下1階

TEL : 045-325-0410 FAX : 045-325-0414 MAIL : community@stspot.jp

<https://welfare-stspot.jimdo.com> 福祉分野における芸術文化活動の基盤整備事業

<http://www.stspot.jp> 認定NPO法人 STスポット横浜

過去の芸術家が福祉施設で行ったワークショップの様子を動画でもご覧いただけます。

以下のQRコードを読み取るか、YouTubeで「アーティストとともに過ごす時間」で検索ください。



リエゾン笠間 × ドウイ、勝見淳平
「触る、で広がる世界」



ひふみ × 岸野雄一
「身体を流れる音楽」



みどり福祉ホーム × 砂連尾理
「身体と身体で出会う」



STSpot
Yokohama